特32
562

情事

村井静馬編輯

明治太平記

二編

下

村井静馬編輯
鮮齋永濯畫

官許

明治太平記

全

東京 壽堂發兌

類國史
屬稗史
冊四十二
函ホ

明治太平記二編巻之二

東京　村井静馬編輯

再説岩城平の城下の搗を中より敵と射方ゞ稍須臾頻りに砲戰に及ぶと雖も更に勝負の判ざる折しも柳川の逞兵百五十人此形勢に憤懣して潛かに搗衍を傳ひて向ひの岸に行き渡く敵の右翼に討てかゝれば思ひ掛なき変なる故賊軍大いに色めき立て自余の官兵是に気を得て斉しく搗を打渡り微塵に奮れと競ひ

村井靜馬編輯

鮮齋永濯畫

官許

明治太平記

全

東京 壽堂發兌

類國史屬稗史 冊四十二 函ヒ 市

明治太平記二編卷之二

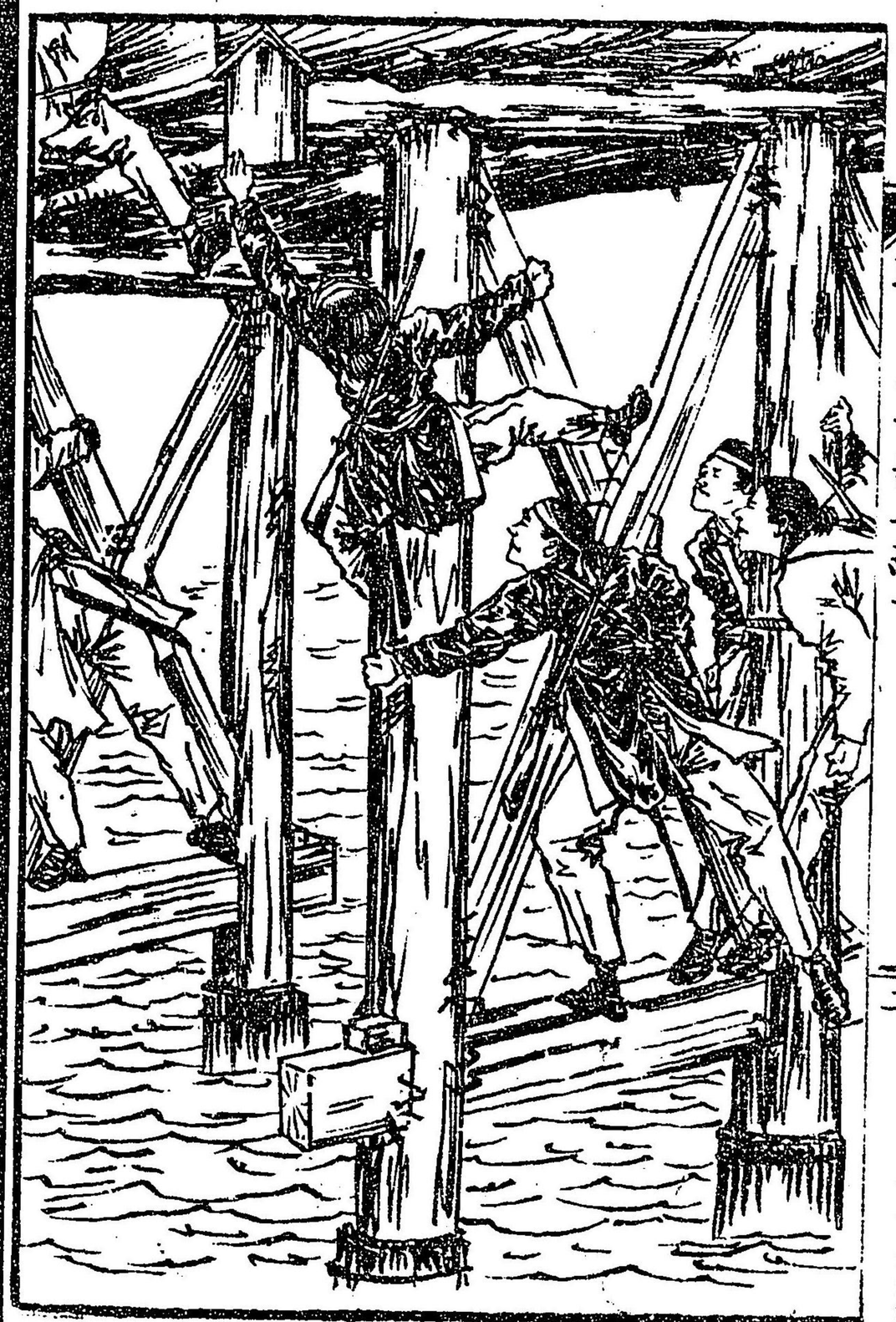
東京　村井靜馬編輯

再説岩城平の城下の搗を中より敵と躬方が稍須臾頻りに砲戰に及ぶと雖も更に勝負の判ざる折しも柳川の逞兵百五十人此形勢に憤懣して潛かに搗桁を傳ひて向ひの岸に行き疾く敵の右翼に討ぐかれば思ひ掛なき支なる故賊軍大いに色めき立ち自余の官兵是に氣を得て斉しく搗を打渡り微塵に奮れと競ひ

蒐まる勢ひ破竹の如くなれば賊軍這所をも支へこの称て皆本城へ退くを勝に乗ッたる官兵ゞ追て城際に逼りつゝ一挙にあるを乗取らんと息をべ吐せず攻立るべ賊兵も又落されじと互ひに死力を尽すぞ両軍の砲声四方に響き天地も為に崩るゝと思ふばかりの形勢ありしゞ其日も已に暮るゝぞ官軍まゝ再挙を謀り兵弦城外の要地に引く惣軍疲労を休め居たるを其夜三鼓の過る頃忽ち城中に火の燃上りて天を焦がゞ

如くなるぞ官軍さるゞ怪て卒ふ兵を操出し稍本城に至りて見るに賊一人も在らざれば官兵頓て残炎を消して輙く城を乗取り後にいりて様子を聞けば賊軍この城の嶮岨を頼み力を極めて防戦せしに僅に半日を支へ得ずして関門及び切所を破られ既に城外に攻詰られしや奈何ともせん詮方なく自ゝ防ぎ難き知りて此夜城に火を放ち終に濱街道より東に走りるふん分ばかの城

柳川の精兵敵軍を襲ひ竊に橋桁を傳ふ



要害堅く守る為め八便りて攻るに利なるを知り
て這回も官軍方の死傷賊軍より多しとす
是時より方り仁和寺の宮會津征伐総督として西
園寺壬生の両家を従へ諸軍を率ひて越後口に
在り既に官軍長岡の城を得しより其近傍に墨俵
設け専ら武備成盛んなるに賊軍も亦堡塁を
築き徳川家の脱走の兵及び會津米澤長岡等乃
藩兵多人数に成守り居りて官軍の往来を妨
さぐ仍て日毎に砲戰行れども勝敗を決せ
ず斯て七月廿四日官兵遂に軍議を決し一挙に
賊の砦を破りて會津に進む謀計を定め諸軍の部署
を做を折から此時一隊の官軍別に大艦にうち
乗りて水路を新潟田の領内に到着せしの聞へ有
れば諸軍いよ〳〵力を得て明暁は一揉に賊の砦を打破らん
とて将士等ものゝ眠りに着しに賊軍の方にては兼て
内通せる者ありて是等のよし審に知るを既に

夜半と覚しき頃精兵許多繰出して敵の要地に設けたる塁へ潜かに押寄せて大小砲を乱撃せしかば斯るべしとも毫知らぬ官兵ハ枕よりなく夢を結べる折から此形勢に駭き覚ましも支度き術計もなく傷死被ふ者もいりく四方へ敗散為たるぞ賊軍ハ此勢ひに乗じ直ちに長岡の城を襲ふ此時城中の官兵等を遥かに砲声の響く聞て備を我兵賊軍に向ふ故に合砲を發するうちと人々装ひをなす程に砲声漸次に近ぢくふぞ城兵甚ぞ怪しむ所へ一個の細作走来りて賊軍此城に来り侵さと注進に及ぶうち賊兵已に間近く逼りて弾丸をうち掛て一挙に攻乗取らんとせり城兵大いに駭きて須臾の程ハ防ぎしかど官軍兵死諸方に分けて城中小勢なるのみ既に今暁賊若へ師を向るの約定ぬ敵より襲ふ支ゑどハなるべくと由断せしに意外に出たる支あれば遂に城を保ちかねて一方よりしく敗走なす賊兵ハ尚脱さじと頻りに逼りて官

軍を川の中へと追込まんとす官兵いよいよ狼狽あのく川を渡さんとして命を殞さもとめ左右して夜の明る頃賊軍長岡の城を復せり余ば賊徒の此城を斯く速に落せしに援る者ありて其故を奈何と問へば始め官軍長岡を得れども此地の市民等旧領主を尚も念ふの情ありて常に官軍の動静を探りて賊徒に内通する夫多く別て這回賊砦へ兵を向けるの趣きなど具さに報ずる故に賊軍奇功を奏せしぞ斯て廿六日に至り官軍兵を二手に分ち一手へ榎嶺妙見坂に屯し一手へ信濃川の西南に沿りて砲臺を河岸に築き賊軍と争へり賊徒も所々に陣営を設け大挙して川を踰へ逼らんとするの勢ひなるゆゑ官軍頗る戰ひ悩まして或ハ議して言へるやう此程長岡を得たるより賊勢甚ぞ鋭くして躬方大いに苦しめり姑く三國峠に退き鋭気を避けて労を撃ぞ却りて全勝なるべしと多く其時参謀山縣其首を左右に打掉て今や敵と對陣しくへ一歩を引ば

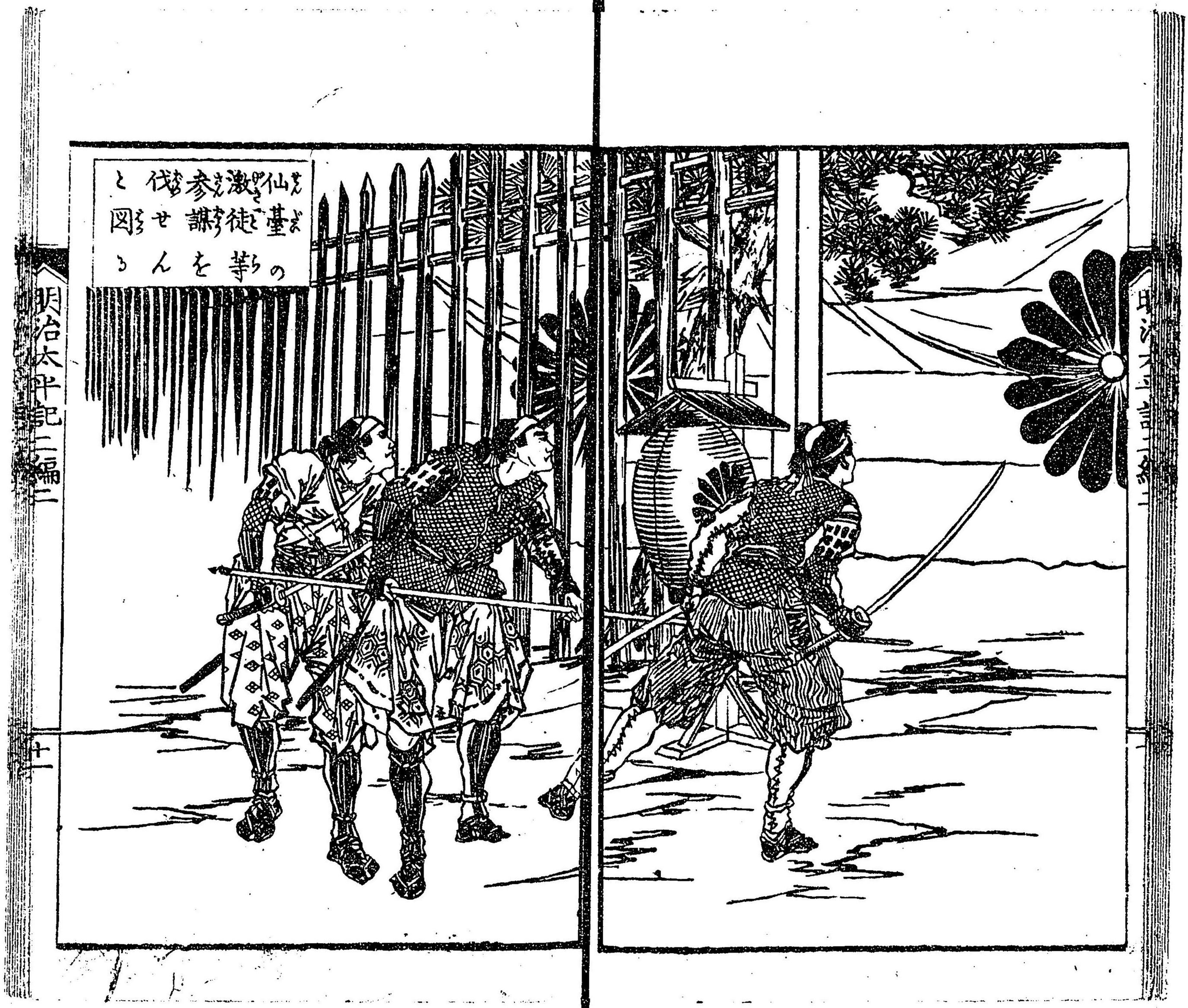
明治太平記二編
明治太平記二編
言の下に
山縣衆
軍を激す

賊威を増し一歩進めば賊謀を折らん斯の如きの時に當り故なく兵を退けて軍機を失ふ支やいかゝん我聞く白川口の戰ひ官軍利を得て其地方を畧し日々に奥羽へ進めるゝ思ふに賊徒等強暴なりとも必ず後ろに敵ゝるを顧るの心いりて久しく此地に保ち巨に諸君勉めて進擊いりを忽ち功を奏すべしと言ふに衆軍憤激して復攻擊の策を決し廿九日の曉頃官軍霧の深きに乘じ妙見口より進発して潛かに敵陣を窺へば賊徒は前日の勝利に恃りて兵卒大いに官軍を見侮るの心より陣屋の守備を怠らん皆寐ねまりし体なる官兵得たりと刀を拔て會釈も做さず乱入るし數十人斬仆し続いて小銃を乱発せしかば肝を潰せし賊徒等何ぞ堪えき兵粮兵器も打棄てゝ散々に逃走せば此に既に四方の官軍一同に起り立頓て長岡に攻寄せて城下の町々に火を放ち烟りの中より砲擊せしかば賊軍甚だ僻易して長岡城を保つ能はず大敗なしく逃散るに官軍再び

城を得たり仍て長岡の市民等の暴を賊徒に内通せし者共を搦め捕りて悉く軍門に梟けこに此地を定めゝ此長岡は五月以降幾回となく戰爭に兵火の為に焼亡しゆく城閣及び市街も大くは焼亡して荒野に齊しくなりしぞ是月江戸の名称を改めて東京とせらるゝ四方に布告せらるゝ是より先會津征討の督將たる九條澤醍醐の三卿薩長の兵八十人を率ひ道を分ちて奥羽に至りその地の諸藩を指揮されども藩々何れも異存なくして號令頗に行はれず獨り秋田津軽生駒等の兵のみ一意に官軍に帰順せり尓バ會津家大坂城去りて國に退き初めて庄内藩もまた応じて共に兵備を整へて事と図らんとせるに秋田生駒両藩の兵屡庄内と兵を交へ戰ひに及びしに秋田生駒の方常に利なく只夫のみならず徳川及び仙臺の脱兵庄内勢に加はりて既に秋田の國境ひに入り遂に城下に逼るに

至るを鄰藩に援ける者なく實に孤立の姿となるべく其危きこと且夕に迫るべし則ち事成九條家に許ふ時は九條醍醐の両家へ既にして仙臺にあり是より先仙臺米澤の両藩へ九條家よりの指揮にて會津征討の命を蒙り兵を會津の國境に出せしに會津藩書を以て哀を両藩に乞ひ両藩頓て兵を解き南部丹羽三春以下の十藩を白石に會し種々評論に及ぶ總て會津の為に所成へきを

義にかりと称し鄰藩の因をもて渠を救ふ支成盟ひ更に連署して九條家に告せ會藩の罪を宥されんことを請へ仍て九條家此旨を参謀に議せられバ参謀世良某等相俱に言へり會藩誠に罪を謝し城及び兵仗を收め恭順の実を著すべきに夫等の気色なく近鄰の諸城へ兵を出して盛んに防禦の策をなす官軍に敵對し陽に書を出して過ちを飾り哀を乞ふとも謝罪の道何くにか


仙臺の激徒等を伐て参謀せんと図る

ゆゑん然るに諸藩之を是とし連署を君に献ずる心底甚だ訝しし且聞く仙臺以下の藩士等竊に賊軍に加はる者多し因て採用あり一旦一たび則ち書面を差戻し再び兵を繰出して會津を討つべき旨を命ぜり仙臺以下の藩兵心中更に疑れに服せず中にも過激の藩士等へ大いに怒り言へる由督將たる九條家に事を容んとせらるを參謀の徒の是を拒む朝廷の威を挾み已が意見を逞しうする奸悪恕まざるを遂に參謀世良氏を要殺し其の罪

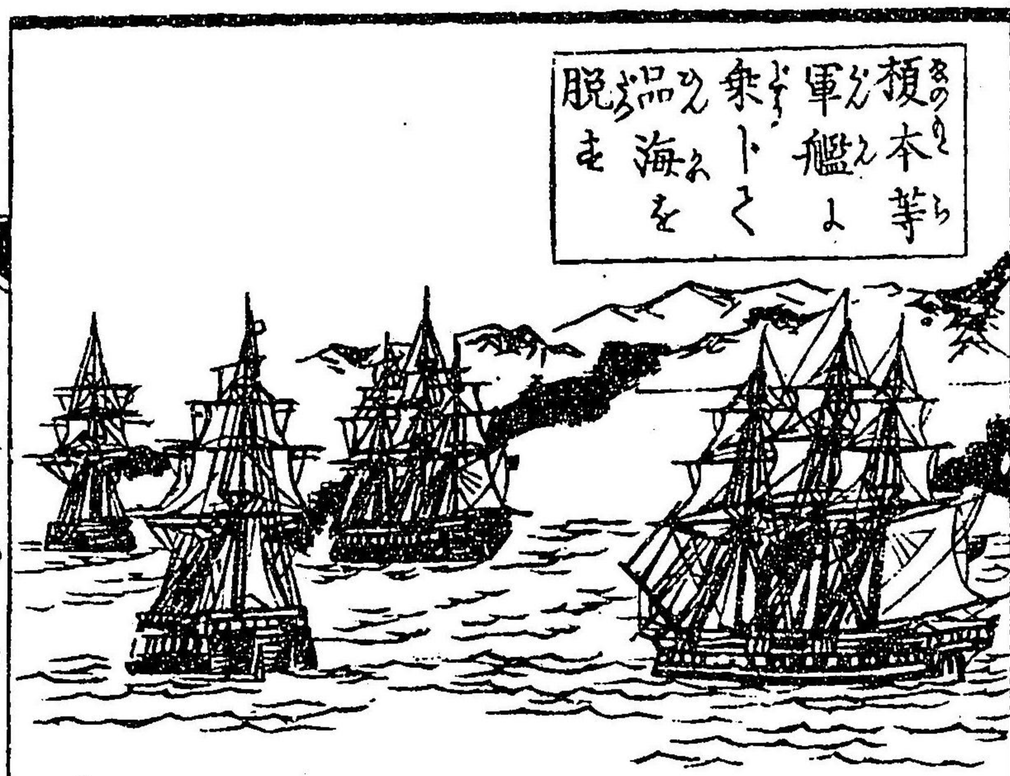
狀を唱へて以て大いに諸藩を煽動るまゝ奥羽の各藩此為に動きて俱に會津を援けんとおの〳〵事を謀るに至れば九條醍醐の両卿も附屬の兵士を引具して頓て仙臺を立去て盛岡に至らるに此地の藩主南部氏も仙臺と同意なるを以督將の命に從ふ仍て直ちに這所をも去りて出羽の秋田に赴きしに是時澤卿秋田に遊れば両卿是と會議せらるゝ潛かに間道より使節を發遣し此地の危急に及べるを東京へ報ずるゆゑ朝廷大いに

駿きめひて仙臺以下の諸藩主の官爵を削り取り此輩をも追討のため益兵を奥羽へ送り是より先輪王寺の宮ハ既ニ上野の破るゝ及び覚王院等ニ誘はれて山内を脱走ゝ姑く奥羽ニ潜ゝ在りしが此ハ仙臺ニ赴かれしと藩主尊く奉ぜるより同盟の諸藩ニ於ても是が為ニいよゝ勇て今ハ断然官軍ニ逆ひて奇しく秋田城ニ逼るもぞ城兵まゝく防禦ニ苦ゝ斯くハ迚も此城の保ち難しと思ふ折ゝ薩州土州佐賀嶋原平戸等の兵士の面々此時秋田ニ到着せしゝ城中ゝ力を得て是より官軍大いに振へり尓べ几條家以下ニ姑く敵中ニ在りとして最も苦心を極めしが是ニ至りて再生の思ひと共ニ為なりしとぞ斯て秋田の官軍ハ已ニ勢ひを得たりしゝ遂ニ寄手を退けて漸次ニ近傍を略定るせば又諸道ゝ官軍も日を逐ひ敵地ニ深く所り入り既ゝて二本松及び三春の両城をも幾程もなく攻落し尚も師を進むるもぞ仙臺以下庄内等の兵屡官軍を邀へ討く互ひニ勝敗ゝ

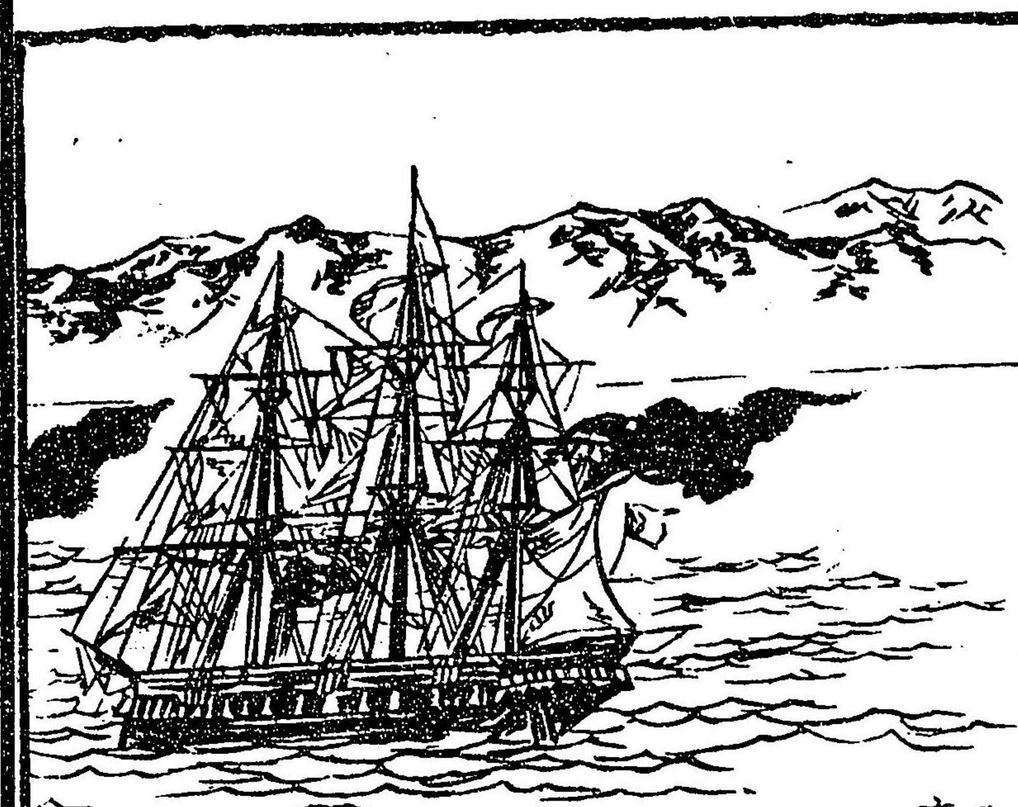
るゞ一隊の官軍奮激して遂に仙臺領に入り駒ヶ峯をべ攻取るべ別軍はまた南部米沢庄内等と接戰あるに賊軍頗る強勇にして官軍數回利を失ふ中白川口且つ越後口の賊兵等ゝみ大敗して両口とも破れる其聞へあるに乗り賊徒等憑こゝ我失ひて兵気尠〳〵拆けたるを官軍得たりと攻蒐りくゞ終に賊軍大いに敗し已にして仙臺以下四藩の城下に逼らんとせり尓べ又徳川慶喜は水戸にあり恭順の他を見返るの心ありに其頃脱走の激徒等

君主を奪ひ
なんと脱
兵水戸城
を窺ふ

が水戸の近傍を徘徊し慶喜は屏居あるを奪ひ事を挙んと図まるゝ風聞専らありしゝ倘やさる支いらんと慶喜あも苦慮せるを見しが曩に徳川亀之助に既に封土を給ひて駿府を居城と定め支へ慶喜喜ありしく書を上らせ駿府に移らんと請されしに朝廷あを孤聽されしゝ頭て駿城に至りて开処ゝく屏居せるを是月榎本鐮次郎松平太郎荒井郁之助等数百人永井玄蕃を頭ゝ開陽丸回天丸蟠龍丸神速丸長鯨丸大江丸鳳凰丸ゝに軍艦七艘を率ひ北国を鎮定せんとの書を朝廷に出し置て品川海を脱帆せり其故を奈何と言に素より榎本等甲乙を主家の恭順を懌ばず既に過し日に三兵隊の輩が江戸を脱する時に榎本潛に謀を合せ機を見て共に援けんとせり然るに脱士等奥羽に赴き彼地の諸藩と同盟し戦ひ最中なりと聞き介あらば我輩此艦に乗じ北海を横行して陸軍を援けんと斯る



榎本等軍艦に乗りて品川海を脱せ



事に及びしとぞ徳川家此旨を聞き駿く事限りなく飛船をもつて追撃しうど止むることを得ざるしべ是非なく朝廷に訴れべ朝廷大いに怒らせ榎本等をして海賊に擬らく事殊外国公使に告く渠と接せるを勿らしめ且海岸の諸藩に令して脱走船の輩に食物を賣ることを禁ぜり余る程に官兵等は二本松の城に據り爰かく諸軍を分配るー仙臺以下の藩々を攻め其領内に進めども更に

會津を顧みざれど會藩士等は脱走の兵と倶に地方の各路堅く戍りまもり備を嚴にせり此とき参謀伊地知其板垣其等議して言ふやう會津は賊の根元なり仙臺等は其枝葉なり然るに今その根元をさし置き只枝葉をのみ攻るとも遂に殲滅なるべし寧ろ根元たる會津を伐ぜば枝葉の諸藩は自と枯るべし殊更會津若松の城は今より三十日を過ぎば雪深く降積りて輙く兵を進めがたし且つ會津兵の備方を熟探り察るところ出口々々に兵を置て我が兵を支へんとせるその守備最も嚴重なれば容易に敗りがたし雖も唯猪苗代の口のみ賊兵險阻を恃むが故に嶺に砲臺を設けたるのみさせる備へのなりとも見へず躬方此口より進ぶべし賊の膽をぬ奪ふべしとて軍議一決したりしかば則ち諸藩の兵を分けて仙臺以下の押へとなし更に八月廿日に至り薩州長州土州大垣大村等の五藩の選兵二本松を進發して會津の封境を侵すべし賊徒は豫て設けたる臺場に

りて大砲を発し頻りに防戦為たりしかど官兵ハ斯なるべしと思ひ設けし支あり史此筒先を些とも怖れず射方よりも小銃を続けさるに打掛々々遂に嶺に攀登り壘場を奪ふに敵を走らせ忽ち猪苗代の要所抜たて いよ〳〵兵を進むる程に賊徒等或ひハ槁を撤し〳〵往来の妨げあるとも假槁を作りそを渡り又ハ切所に兵を伏て敵を啞止んと為たるとも官軍撃て之を走らせ既に廿日に二本松を発し廿三日に若松の城下に攻入り即日三の郭を

抜たる斯く神速なる働きに賊徒等大いに駭きく官軍天より降りたるかと皆本城に退き是に依て官兵も輙く城際に逼りしかど射方劣勢なりざる故日毎に大砲を城中に打掛け只賊勢を挫ぐのみ手甚き戦ひもせず諸軍の来るを待居たり会津の兵士等ハ遠く諸方の出口を戍りて官軍の襲ふと侍掛しハ何時の程ハかり官兵ハ険嶮を越へて逸速くも城下に来り戦ふと聞き何れも驚嘆為ざるなく持場の守りを棄て若松

會戰屢軍陣夜
兵官の襲

城より走来りぬ是より於く城兵ども廿五日の拂曉より大軍一時に城を出て官軍の屯所を襲ふゝぞ不意を打れ一度あり故官兵大に敗績して死まる者最多けれ共参謀防方より指揮して暫く兵を各所に散せば賊徒等伏兵なりんを惧まく敢て兵を進めず引く城に退きしが已にして官軍の散りたる兵の集まるを見て賊兵再び城を出て始めの如く襲ひしかば又官兵等敗走せしが尚ほ備へ置きたる事なれば官軍の別手の兵敵の後に起り立て頻りに砲を発まれば暴に敗北官兵も返し来りて戦ふゝぞ城兵大に乱れ立て遂に城中に退きたり此日尾州紀州肥前等の藩兵白川口より進み来れば藝州宇都宮大田等の兵藤原口より進撃すし共に諸道の賊兵を討て勢ひを示し既に日暮に及ぶ頃まの若松の城下に着せり仍て官軍大に気を得て斯て城を乗取るも輙まらんと思ひしに其夜三鼓と覚しく頃城兵潛かに

官軍の陣営を襲ふ官軍くるゝ周章騒ぎく死傷の者も多うして戦辛く備を立直しく遂に城兵を郤けしが是より賊徒等夜に乗じて屢来り侵せしゑ官軍防禦に苦しめりしく

是より若松の城落去の事件続いく函館松前等の戦争の趣きハ第三編に記まゝ

明治太平記二編巻之二終

版権
免許

第六大區八小區
本所外手町十八番地
著者 村井靜馬

第壹大區六小區
日本橋通二丁目四番地
東京 書肆 小林鉄次郎藏板